

『武器よさらば』における釣りのモチーフ

日 下 洋 右

The Motif of Fishing in *A Farewell to Arms*
Yosuke KUSAKA

マイケル・S・レノルズ (Michael S. Reynolds) は、『ヘミングウェイの最初の戦争——「武器よさらば」の成立』(*Hemingway's First War: The Making of "A Farewell to Arms"*) (1976) の中で、フレデリック・ヘンリー (Frederic Henry) がオーストリア軍の迫撃砲弾によって重傷を負う場面と、ミラノのアメリカ病院で送る入院生活の様子を除けば、『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*) (1929) の大部分が作者の伝記とは無縁であることを発見している。アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) (1899—1961) は、『武器よさらば』の第一部と第三部の舞台となった、1915年夏から17年秋までのイタリア前線で繰り広げられた戦闘に参加したことも、それを目撃したこともなかったからである。ヘミングウェイは『戦う男たち』(*Men at War*) (1942) の序文の中で、“A writer's job is to tell the truth.”¹ と述べているが、この発言はヘミングウェイ文学の本質が個人的な体験をありのまま描くことにあるといっているのではない。1958年にヘミングウェイは『パリ・レビュー』(*The Paris Review*) 誌のジョージ・プリンプトン (George Plimpton) からインタビューを受けた時、自己の文学の立場を再び主張している。

Interviewer: Have you ever described any type of situation of which you had no personal knowledge?

Hemingway: That is a strange question. By personal knowledge do you mean carnal knowledge? In that case the answer is positive. A writer, if he is any good, does not describe. He invents or makes out of knowledge personal and impersonal and sometimes he seems to have unexplained knowledge which could come from forgotten racial or family experience.²

この発言から明らかなように、個人的または非個人的な知識や体験から出来事をいかに本当らしく作り上げるかが作家の任務である、とヘミングウェイは力説しているのである。それ故、地理的にも歴史的にも正確に描かれているため、レノルズによって否定されるまで、『武器よさらば』が英米の批評家はもとより、物語の舞台となった地元イタリアの批評家までから自伝小説とみなされていたのは、それがみごとに作り上げられた作品であることを証明しているといえよう。ヘミングウェイは直接体験したことがないイタリア＝オーストリア戦線の戦況を歴史書、軍事史、日記、新聞・雑誌記事、旅行案内、地図、写真などの膨大な関係資料を参考にしながら、想像力を駆使して生き生きと再現したのである。歴史的な出来事とそれが起こった時期や場所が、作者の手から正確に流れ出ているのである。それ故、ヘミングウェイは場所感覚が鋭く、地形の描写が綿密で正確であったと指摘するカーロス・ベイカー (Carlos Baker) の見解は的を射ている。ベイカーはヘミングウェイ文学の精髓を、一般的な描き方も過度に強調された描き方をも回避して、「あるがまま」描写しようとしたヘミングウェイの意図の所産とみている。³ フィリップ・ヤング (Philip Young)

は、ベイカーの見方を裏づける証拠を見つけている。メアリー・ヘミングウェイ (Mary Hemingway) によれば、ヘミングウェイは『移動祝祭日』(*A Moveable Feast*) (1964) の中で描かれる街路の名称とその距離との正確を期すため、実際に何度も歩いて確認したといわれるからである。⁴

しかし、『武器よさらば』の戦争場面を除けば、ヘミングウェイの個人的な体験や知識と密接に関連する点が、控え目な形ではあるが作品の中に散りばめられていることも事実である。例えば、狩猟と共にヘミングウェイの人生を楽しくも豊かにもした釣りが、この物語で重要な機能を果たしていることである。釣りはヘミングウェイが三歳の誕生日に父親の手解きを受けたといわれるが、彼がたしなんだスポーツの中でも、銃猟と並んでこれほど彼の人生と作品に多大な影響を及ぼしたものはないかもしれない。アフリカの狩猟旅行は、旅行記『アフリカの緑の丘』(*Green Hills of Africa*) (1935) や名作「フランシス・マコーマの短い幸福な生涯」(“The Short Happy Life of Francis Macomber”) (1936) と「キリマンジャロの雪」(“The Snows of Kilimanjaro”) (1936) として実を結んでいる。釣りの体験は、「大きな二つの心臓の川」(“Big Two-Hearted River”) (1925) や『老人と海』(*The Old Man and the Sea*) (1952) という傑作として結実している。ヘミングウェイの文学を支えている地理感覚は、幼い時に父親から教えられた釣りによって培われたとみてよい。釣りの基本の一つは、釣り場となる川や湖や海の状況とその地形をいかに把握するかである。生涯にわたってヘミングウェイの人生と切り離すことができなかった釣りは、鋭敏な場所感覚を養うことに寄与したとみて間違いない。

『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*) (1926) でも、ジェイク (Jake) とその仲間がスペインへ出かける目的は、パンプローナの祝祭見物と釣りであり、イラティ川を舞台に生き生きとした釣りの場景が描かれている。⁵『武器よさらば』では、魚釣りに言及された場面が四箇所認められる。とりわけ、フレデリックとキャサリン・バークレー (Catherine Barkley) の運命を左右する重大な局面では、釣りが湖を渡ってスイスへ脱出するための下地として巧みに利用されている。二人が嵐の中をボートに乗ってスイスへ逃避行する劇的な場面では、流し釣りがその伏線として重大な役割を果たしているからである。カボレットの退却が戦争のクライマックスとすれば、スイスへの脱出は愛のクライマックスといえようが、この愛のクライマックスでは、作者の最も得意な領域である釣りが実に巧妙に用いられているのである。本論では、個人的な体験や知識とは無縁であるとされる『武器よさらば』にも、長年にわたって蓄積された釣魚というヘミングウェイのきわめて個人的な経験と知識が、出来事という織地に織りこまれていることを明らかにしようとする。『武器よさらば』は紀行文学の要素を多分に持っているにもかかわらず、その観点から物語を考察した研究の形跡は、ロバート・O・スティーヴンズ (Robert O. Stephens) の『ヘミングウェイのノンフィクション』(*Hemingway's Nonfiction*) (1968)、チャールズ・A・フェントン (Charles A. Fenton) の『アーネスト・ヘミングウェイの修業時代』(*The Apprenticeship of Ernest Hemingway*) (1954) の一部、レノルズの『ヘミングウェイの最初の戦争』の一部にしか認められない。ヘミングウェイ文学の本質を明らかにするためには、紀行文学という側面から『武器よさらば』の検討をいっそう推進する必要がある。

フェントンはヘミングウェイの特別読物記事や報道記事に、ユーモア、パロディ、風刺、アイロニーなどの技法を発見しているが、記事の手法が作品にどのように反映されているのかに関する具体的な分析や検討を試みてはいない。⁶『武器よさらば』にヘミングウェイの読物記事や報道記事を中心とした、ノンフィクションの影響がみられることを具体的に指摘したのは、スティーヴンズである。『トロント・ディリー・スター』(*The Toronto Daily Star*)紙に寄稿された読物記事「ベテラン旧前線を訪問す」(“A Veteran Visits the Old Front”)⁷の一部は、物語の冒頭部分と第七章

の一部の描写に反映されている。1922年の希土戦争⁸を取材した『トロント・ディリー・スター』紙の一連の報道記事⁹は、物語の山場であるカボレットの退却の描写に利用されている。1922年にスイスの冬季スポーツを取材した『トロント・スター・ウィークリー』(*The Toronto Star Weekly*)紙の読物記事¹⁰は、物語の中でフレデリックとキャサリンがスイスへ上陸後、スイスの税関の署員からモントルーの冬のスポーツの魅力を聞かされる場面の背景として生かされている。¹¹

レノルズも1920年代初期に書かれたヘミングウェイの旅行記の技法が、『武器よさらば』で利用されていることに注目している。旅行記の手法の一つは、旅行案内書として利用できるほど正確な情報にあふれていることである。物語でも北イタリアの地理、ホテル、カフェ、食事、ワイン、駅など広範囲にわたる情報が精確に描かれている。ヘミングウェイが旅行記で発展させたもう一つの手法は、舞台裏の情報に通じている専門家然とした立場に立って、内側から目立たぬように語るというものである。この方法は専門知識を誇示することなく、ごく控え目に述べる主人公兼語り手の性格と視点に反映されて、その信頼性を確立するのに貢献している。このように、『武器よさらば』の手法と主人公の役割は、ヘミングウェイが20年代初期に寄稿した特別読物記事や報道記事から継承されたものである、とレノルズは力説しているのである。¹²

『武器よさらば』に認められる旅行記風の特徴は、レノルズも指摘するように、旅行者に必要な情報を提供する旅行案内の様相を呈していることである。例えば、物語ではホテルの選び方やホテルの作法に関する情報が与えられている。病状が回復して前線へ復帰する前日に、フレデリックはキャサリンと一夜を過ごすため、ミラノの駅前にホテルを見つけようとする。荷物を携帯していないので、断わられるのではないかというキャサリンの懸念は無用である。というのも、これから向かうとしているホテルでは、手荷物の有無にかかわらず、また二人の関係が問われることなく宿泊できる、とフレデリックは承知しているからである。しかし、ホテル・カヴールなら、二人を泊めてはくれないであろう、とフレデリックは語っている。当時ホテル・カヴールはミラノでも指折りの豪華なホテルであったので、フレデリックはこの事情を熟知していたことになる。また、フレデリックはキャサリンを追ってストレーザへ赴いた際には、そこの最高級ホテルの一つグラン・ホテル・デ・アイル・ボロメに宿泊している。1920年代にヨーロッパ各地を飛び回って身につけたヘミングウェイの豊かな旅行経験は、ホテルの種類だけではなくホテルの作法にも反映されている。例えば、フレデリックは食事の注文の仕方や注文すべき料理を心得ている。彼はミラノの駅前のホテルには獐鳥肉が置いてあることを知っており、スフレ・ポテトを添えたヤマシギ料理、栗の裏ごしスープ、サラダ、そしてデザートにサバイヨーネの夕食を注文し、飲み物にカプリ酒とサン・エステフェを選んでいる。

フレデリックはホテルに関する情報にとどまらず、ミラノの一流のカフェにも精通している。入院中のフレデリックは松葉杖で歩き回ることができるようになると、ガレーリア¹³にあるピフィやグラン・イタリアのカフェへキャサリンと食事に出かける。当時の旅行案内書にも、ピフィとグラン・イタリアは、ガレーリア・ヴィットリオ・エマヌエーレ通りにある有名店と記されている。¹⁴フレデリックは高級な食事と酒を味わうことができる場所に詳しいことに加えて、飲食物そのものの通でもある。例えば、ヘミングウェイ・ヒーローが酒をよくたしなむ点は周知のことだが、フレデリックも高級品を味わう酒の通であることがわかる。入院中のフレデリックが黄疸にかかって臥ていたある日、看護婦のミス・ヴァン・キャンペン(Miss Van Campen)が病室へ入ってきて衣裳タンスを開け、ブランデーの空瓶を見つける。They [The empty bottles] were mostly vermouth bottles, marsala bottles, capri bottles, empty chianti flasks and a few cognac bottles. The porter had carried out the large bottles, those that had held vermouth, and the straw-covered

chianti flasks, and left the brandy bottles for the last. It was the brandy bottles and a bottle shaped like a bear, which had held kummel, that Miss Van Campen found.¹⁵ 衣裳タンスの中に隠された空瓶からですら、様々な名酒を味わっているフレデリックの酒通の実態が推察できよう。フレデリックが酒通であることを証明するきわめつきは、ミス・キャンペンに怒らせた熊の形をしたキュンメル酒の空瓶である。最上のキュンメル酒は、熊が前肢を上げて座った形をした瓶に入っており、ロシア産である、とフレデリックはミス・キャンペンに説明するからである。グラン・イタリアの給仕頭ジョルジュ (George) は、酒や食の通としてフレデリックに一目おいている。フレデリックのために席を取っておいたり、金が足りない時には用立てたりする親切な行為は、フレデリックを通して尊重し、待遇しているジョルジュの意識の表出である。このような特別待遇は、フレデリックがその道の通であることを裏づけるのに役立っている。¹⁶

スイスへ逃亡する前日の夕方、フレデリックはキャサリンと宿泊していたストレーザのホテルで、同宿のグレッフィ伯爵 (Count Greffi) からビリヤードの相手を申しこまれる。以前にも一度フレデリックは同じホテルで伯爵からビリヤードに誘われ、15点のハンデをつけてもらったにもかかわらず敗北している。今回もプロ級の腕前の伯爵に18点のハンデを得てゲームを開始するが、94歳の老紳士に再び敗れ去る。しかし、プロ級の人にアマチュアが敗れたとしても、それは敗北でない。伯爵がフレデリックをビリヤードに誘うこと自体、素人ながらすぐれたフレデリックの腕前を認めているからに他ならない。それ以上に注目に値する点は、ビリヤードの合間に、ヨーロッパの名高い外交官として一世を風靡した人物と、読書論や人生論や宗教論を対等に交わることができる相手としても、フレデリックが選ばれていることである。この点は、信頼に足る事情通であるというフレデリックの語り手としての重要な役割を一段と強めている。その上、ビリヤードのゲームの途中で酒を酌み交わすシーンは、フレデリックが伯爵から酒の通としても認められていることを示している。

『武器よさらば』の中で、フレデリックが主人公兼語り手として読者の信用を勝ち得ているもう一つの重要な点は、経験豊かな釣り師としての役割である。物語ではフレデリックは釣りに対する人並み以上の関心や知識を持ち合わせ、釣り場となる川の地形を読む確かな眼を備えている。しかし、この種のフレデリックの特質は、出来事という生地にごく控え目に織りこまれていることが多い。例えば、フレデリックが負傷して野戦病院へ入院中、親しい司祭が見舞いに訪れる。司祭は戦争が終結すれば帰りたいと願っている故郷アブルッツィの地方色をフレデリックに話してきかせる。その中で司祭は “At Capracotta. . . there were trout in the stream below the town.”¹⁷ と語るが、川と魚への言及はフレデリックが他の登場人物から、釣りに関心が深くて詳しいと受け取られていることを明らかに示している。釣りに対する趣味や豊富な知識は、ヘミングウェイの個人的な体験に由来している。

ヘミングウェイは三歳の時に早くも釣りの手解きを受けている。三歳の誕生日のプレゼントは、父に初めて釣竿を与えられて、釣りに連れていってもらったことであつたからである。ヘミングウェイは三歳にして自然を愛する小博物学者であつたばかりか、釣りのコツを会得して大物釣りの才能を発揮したと母親を喜ばせている。四歳の誕生日の贈物も、父が1日がかりの釣り旅行に連れて行くことであつた。¹⁸ このように、自然とアウトドア・ライフを愛好した父親の影響を受けて、ヘミングウェイも幼少期に釣りの世界へ足を踏み入れ、釣りは銃猟と共に彼の人生の大きな部分を占めることになったのである。釣りは彼の芸術の世界へも深く浸透し、様々な作品のモチーフとして利用されているが、その最大の所産が『老人と海』である。

タリアメント川に飛びこんで単独講和を結んだフレデリックは、ストレーザのホテルのバーに設えられた椅子に座って、タリアメント川からさらにピアヴェ川まで後退したイタリア軍の動きを

新聞で読みながら、ピアーヴェ峡谷の景観を回想している。

The army had not stood at the Tagliamento. They were falling back to the Piave. I remembered the Piave. The railroad crossed it near San Dona going up to the front. It was deep and slow there and quite narrow. Down below there were mosquito marshes and canals. There were some lovely villas. Once, before the war, going up to Cortina D'Ampezzo I had gone along it for several hours in the hills. Up there it looked like a trout stream, flowing swiftly with shallow stretches and pools under the shadow of the rocks. The road turned off from it at Cadore. I wondered how the army that was up there would come down.¹⁹

ピアーヴェ渓谷の描写にも、ヘミングウェイの個人的体験と密接に関連する点がいくつかさりげなく書きこまれている。言うまでもなく、ピアーヴェ川はヘミングウェイが1918年7月8日の真夜中に、オーストリア軍の砲撃と機銃掃射を受けて重傷を負った現場であるので、ピアーヴェ川はその時の出来事を想い起こさせる。コルティナ・ダンペッツォに対する言及には、1923年のウィンター・スポーツのシーズンが終りかけた3月頃、ヘミングウェイと妻のハドリー（Hadley）が初めてそこに滞在した時の出来事が暗示されている。夫妻はコルティナの中央に位置するホテル・ベルヴューに滞在し、妊娠中のハドリーはレナータ・ボルガッティ（Renata Borgatti）というピアニストと知り合って、彼女と散歩やショッピングに出かけたり、音楽や育児について論じ合ったりしたが、一方ヘミングウェイはスキーと創作に情熱を燃やしたといわれる。²⁰ コルティナに滞在中、ヘミングウェイはトロント・スター社からルール地方の紛争をめぐる独仏関係について至急報を送るよう命を受け、ハドリーをホテルに残したままドイツへ赴いた。この任務が終了して4月半ばにコルティナに戻る時、ヘミングウェイはスキーの代りに釣り道具を持参することになる。²¹ この時に釣りをした体験は、“Up there it looked like a trout stream, flowing swiftly with shallow stretches and pools under the shadow of the rocks.”という川の地形の描写に反映されているとみられる。一方、コルティナの町並みとピアーヴェ川の支流での釣りを背景に、ハドリーとのきまざい関係を描いた短篇が「季節はずれ」（“Out of Season”）（1923）である。²²

レノルズはピアーヴェ渓谷の風景描写に続く、“I wondered how the army that was up there would come down.”というフレデリックのコメントを、1920年代初期のヘミングウェイが単なる旅行作家でなかった証拠の一つとして特筆している。レノルズはピアーヴェ川流域の景観の描写をThe paragraph is travel literature but with a purpose beyond the view.²³ と主張し、その根拠としてスティーヴンズの見解 Even when he wrote of events from a vacation trip, he reported the travel adventures as they provided insights for social analysis.²⁴ を利用している。その結果、*A Farewell to Arms* uses the landscape of Italy at war as a crucible containing both action and commentary.²⁵ とレノルズは主張し、ピアーヴェ川流域の風景描写とイタリア軍の作戦に対するフレデリックの疑念を a typical example of Hemingway's travel-writing mode²⁶ とみなしている。

スティーヴンズはヘミングウェイの社会的分析と批評に基づいた旅行記の例として、ヘミングウェイが1922年にドイツの黒い森へ釣り旅行に出かけた時の体験を踏まえた一連の記事のことを示唆している。それらの記事には、大戦後のドイツのインフレと官僚主義の欠陥に対する社会批判といえるものが底流に潜在しているからである。²⁷ スティーヴンズは具体的な旅行記事をあげていないが、ドイツの官僚主義批判の例としては、釣りの許可申請を高圧的な態度で無視して、たらい回しにする官僚の実態を描いた、「許可証を得る障害を乗り越え、バーデンの釣りは申し分なし」

(“Once over Permit Obstacle, fishing in Baden Perfect”)²⁸ があげられる。ドイツのインフレを批評した記事の例としては、「ドイツ人マルクに全くお手上げ」(“Germans Are Doggedly Sullen or Desperate over the Mark”)²⁹ と「ドイツへ渡るのが金もうけに一番」(“Crossing to Germany Is Way to Make Money”)³⁰ などがあげられる。³¹ しかし、ピアーヴェ渓谷の描写とイタリア軍の戦術に対する批評は、単独講和を結んだフレデリックにとって、戦争がそう簡単に彼の意識から払拭されないことを示唆したものであり、社会的な分析や批評を目的としたものでない。イタリア軍の動きに対する批判は、イタリア軍の作戦に対する疑問を単に示したものとみるべきであり、フレデリックが軍事方面に精通していることを裏づける証拠なのである。

レノルズも指摘するように、小説の中でフレデリックが初心者として登場することは一度もない。主人公がヘミングウェイ・ヒーローのように、何かを学ぼうとする姿は決して描かれていない。フレデリックに未経験なことがあるとすれば、それは退却した体験がないことである。彼はイタリア第27軍団がカポレットで、ドイツ軍に支援されたオーストリア軍に突破されたことを知らされ、退却準備を命じられた時に、小説の中で物事の仕方を尋ねるシーンがただ一度見られるからである。“Sometimes we clear from the clearing station to the field hospitals too,” I said. “Tell me, I have never seen a retreat—if there is a retreat how are all the wounded evacuated?”³² 退却の体験がないことを別にすれば、彼は登場した瞬間に、既に広範囲にわたる知識を習得していて、豊富な経験を身につけている。『武器よさらば』は1915年の夏の末から始まって、キャサリンが出産の際に亡くなる18年の春で終る。フレデリックはイタリアがオーストリアに宣戦布告した15年の夏の末から、17年秋のカポレットの退却まで前線にとどまっていたので、2年間にわたって戦争とつき合っていたことになる。従って、彼が軍事的知識を蓄積していて、軍の内部事情に通じているのも何ら不思議でない。このように、フレデリックは北イタリアの地理に詳しく、ミラノのような都市やストレーザのような保養地をガイドブックのように熟知している他に、軍事関係の知見をも広く身につけているのである。

事実、小説の中でフレデリックが玄人はだしの専門知識を備え、内幕の情報に通じている顕著な領域の一つは、軍事に関することである。彼が軍事面に明るいため、読者は語り手を信頼して彼の語るイタリア戦線の推移をそのまま受け入れることができるのである。フレデリックは外国人であり、当時のイタリアのイデオロギーに共鳴し、傷病兵運搬車隊の操縦兵としてイタリア軍に身を投じたにすぎないため、軍事関係についてはずぶの素人であったはずである。しかし、彼は2年間にわたって前線に出入りしていた経験から、小説に登場する頃には戦況や作戦を読む軍事的能力を習得していたのである。彼は戦略や戦術に精通するようになったため、まるで軍事専門家のように戦術の誤りを指摘したり、自己の戦略を説いたりする。例えば、フレデリックは膝の傷が癒えて前線へ復帰した時、山岳戦が不利なことを力説して、部下のジーノ (Gino) と戦略論争を展開しているが、彼の主張には戦略の研究家の一面が発揮されている。I meant tactically speaking in a war where there was some movement a succession of mountains were nothing to hold as a line because it was too easy to turn them. You should have possible mobility and a mountain is not very mobile. Also, people always over-shoot downhill. If the flank were turned, the best men would be left on the highest mountains. I did not believe in a war in mountains. I had thought about it a lot, I said. You pinched off one mountain and they pinched off another but when something really started every one had to get down off the mountains.³³

同じ主張は既に第19章にも見出される。入院中のフレデリックは戦況を報じる新聞記事を見て、イタリア軍がバインスィツァやモンテ・サン・ガブリエーレを占領したとしても、その背後に山岳地帯が延々と続くので、山岳戦では勝利を見出せないであろうと結論づけているからである。フ

レデリックの持論は、ナポレオン（Napoleon）がヴェローナ周辺でオーストリア軍を撃破したように、平地で決着をつけるべきだというものである。このように、フレデリックは戦略や戦術を研究している軍事専門家のような能力をも備えた人物として描かれているのである。従って、ピアヴェ峡谷の上流へ進軍したイタリア軍の軍事行動に対する批判は、ヘミングウェイの読物記事の根底に流れている社会的な洞察の延長線上にある批評でない。これは、フレデリックに軍事専門家然とした印象を付与して、戦闘状況を語る主人公が語り手として信頼に足る人物であることを読者に信じこませようとする作者の戦略とみるべきである。

入院中のフレデリックは三週間の予後休暇を取った後、前線に復帰するようにとの通知を受け取る。予後休暇期間は、治療が終る10月4日から25日までである。フレデリックはキャサリンと連れ立って、マジョーレ湖の入江を狭んでストレーザの真向かいに位置するパランツァへ休暇を過ごすために出かける計画を立てる。保養地として有名なストレーザを避けてパランツァを選んだ理由の一つは、ストレーザがミラノから容易に行けるため、顔見知りの人と出会う可能性が大きいのに対して、パランツァがあまり人の行かないところであるため、その可能性が少ないからである。この点は、フレデリックが北イタリアの保養地の地理や情報にも詳しい人物であることを示している。実際、彼はパランツァが美しい村であることも、紅葉の名所であることも、散策用の道があることも、漁師の住んでいる島まで船が出せることも、最も大きな島にはレストランがあることも承知している。しかし、フレデリックがパランツァを選択したもう一つの理由は、湖上でヒメマス釣りができることである。ここでも、釣りが休暇旅行の大きな動機になっていることがわかる。もっとも、その旅行計画は実現されずに終わってしまう。というのも、命令書を受け取った直後、フレデリックは黄疸にかかって、それから二週間病臥せざるをえなくなるからである。

虚構とは異なって、史実ではこの計画が実現されている。しかし、ヘミングウェイが出かけたところは、パランツァでもなければ、ヘミングウェイと行動を共にした人物は、キャサリンのモデルのアグネス（Agnes）でもない。ヘミングウェイは9月末に膝の傷がかなり癒えると、傷病兵運搬車隊の運転手仲間であるミネソタ州出身の青年ジョニー・ミラー（Johnny Miller）と二人で、マジョーレ湖の西岸に位置するストレーザのグラン・ホテル・ストレーザで一日の休暇を過ごしている。³⁴ この休暇旅行でヘミングウェイが得た収穫は、ホテルでイタリア貴族のエマヌエーレ・グレッピ（Emanuele Greppi）伯爵と出会って歓待されたことである。『武器よさらば』の中で描かれているように、伯爵が次々と出してくれるよく冷えたシャンペンを飲みながら、二人はホテルの遊戯室でこの老紳士のビリヤードの相手をしたり、政治論や文学論の話に花を咲かせたのである。小説では伯爵の氏名がグレッピ（Greppi）からグレッフィ（Grefffi）と変更されていることを除けば、その時のヘミングウェイの体験がほぼそっくりそのまま物語の中に採り入れられている。³⁵

タリアメント川へ飛びこんで銃殺から免れたフレデリックは、勤務先を移動したキャサリンを追ってストレーザへ向かう。二人をストレーザへ集結させるのは、もちろんそこが彼らをスイスへ脱出させる拠点として都合がよいからである。ストレーザで落ち合った二人の宿泊先は、ストレーザの最高級ホテルの一つグラン・ホテル・エ・デ・イール・ボロメである。二人がマジョーレ湖経由でスイスへ越境しようとするためには、フレデリックはストレーザとマジョーレ湖周辺の地理的状况に詳しい人物でなければならない。その条件を整える手段として、ストレーザにフレデリックの馴染みのホテルが用意され、そこを拠点に彼はマジョーレ湖で釣りを体験していたという手法がとられたのである。このホテルに二人が宿泊してからスイスへ逃避行するまでのプロセスが、読者からごく自然に受け入れられて、唐突に思われなくようにするため、巧みな創意工夫が凝らされている。フレデリックがこれまで幾度か宿泊していて、このホテルの酒場のバーテンと知己を得てい

るという設定もその一つである。というのも、警察に追われている身には、知り合いのいるホテルの方が安心できるからであり、万一の時には、情報の提供や逃亡の援助などの便宜をはかってもらえるからでもある。

フレデリックはミラノのグラン・イタリアで、ジョルジュから受けた厚遇をこのホテルでも受けている。というのは、グラン・ホテル・エ・デ・イール・ボロメの酒場のバーテンであるエミリオ(Emilio)とフレデリックも、通同士の反応を示し合う仲であるからだ。特に、二人は酒と釣りの通として互いに認め合っている間柄である。目下の場面では、酒よりも釣りが重大な意味を担っている。フレデリックがマジョーレ湖で、単独であるいはエミリオと一緒にたびたび釣りを試みていることを示唆している点は、二人がボートで湖を渡ってスイスへ越境することを、読者にごく自然に受け入れさせる役割を果たしている。フレデリックがこの湖で釣りの体験をしていなければ、湖とその周辺の地理に不案内なままのため、急拠二人がスイスへボートを漕いで渡るのは、不自然で説得力を欠くものとなるからである。従って、釣りはフレデリックとキャサリンとが湖を渡って、スイスへ脱出する伏線として巧妙に利用されているのである。その意味では、逮捕前日のエミリオとフレデリックとが試みた釣りが流し釣りであったことは、作者の戦略の中でも特に注目に値する。フレデリックが釣りを趣味としており、二人が親しい釣仲間であることは、フレデリックがマジョーレ湖を訪れて、何度も釣りを楽しんでいたことを意味している。この事実は、この湖のイタリア側の地形や、島と島あるいは島と湖岸との位置関係や距離などが、彼の頭の中にしっかり入っていることを示している。特に、この日の釣りが陸釣りではなくて流し釣りであった点は、フレデリックに湖の地理的状況をいっそう正確に把握させるのに貢献している。流し釣りは湖上を一定速度で絶えず移動するので、湖とその周辺の地形や距離を頭に入れるには、きわめて好都合であったのである。このように、フレデリックがスイスへ脱出する前日に、二人が流し釣りを試みた点には、作者の用意周到な戦略が潜められているのである。

The barman put on a coat and we went out. We went down and got a boat and I rowed while the barman sat in the stern and let out the line with a spinner and a heavy sinker on the end to troll for lake trout. We rowed along the shore, the barman holding the line in his hand and giving it occasional jerks forward.³⁶

岸に沿ってボートを漕いだという表現には、特に注意を向ける必要がある。二人が荒天の中をスイス領へ向かってボートを漕いでいる時には、嵐のために方向を見失わないようにするため、湖岸に沿ってボートを漕いでゆく部分が多く、その成否は岸との距離が決め手になるからである。

Stresa looked very deserted from the lake. There were the long rows of bare trees, the big hotels and the closed villas. I rowed across to Isola Bella and went close to the walls, where the water deepened sharply, and you saw the rock wall slanting down in the clear water, and then up and along to the fisherman's island.³⁷

湖上を移動するボートから湖岸を眺望している描写は、フレデリックが湖を漕ぎ渡ってスイスへ向かう逃避行に備えて、ボート上から岸辺の目印となる樹木やホテルや別荘を眺め、ボートと岸との距離を握もうとしているかのようなのである。

フレデリックが流し釣りの往路をイソーラ・ベラ島へ向かって漕ぐ点も見逃すことはできない。翌日二人がスイス領へ向かう時にも、最短距離をとるためには、湖の沖へ一度出てイソーラ・ベラ

島を目指して漕ぎ出さねばならないからである。しかも、漕ぎ手のフレデリックがイソーラ・ベラ島までの水中の地形や深度にも注目している点は、まるで当日の脱出の事前調査を行っているかのようである。

“No. Row to Isola Bella. Then on the other side of Isola Madre go with the wind. The wind will take you to Pallanza. You will see the lights. Then go up the shore.”³⁸

パランツァまで行けば、街の灯火がみえるというエミリオの台詞も周到である。パランツァへの言及は、フレデリックが退院直前に立てて、実行に移されなかったパランツァへの休暇旅行計画が、実はこの日の重大な出来事の伏線として抜かりなく準備されていたものであることを想起させるからである。フレデリックが保養地パランツァに詳しいことを十分承知しているので、エミリオはパランツァの街の明かりを目指すようにと指示するのである。さらにいえば、フレデリックはパランツァ周辺の地理にも明るいからこそ、風雨のためにその街の灯火を見失っても、ボートの進む方向を誤まることのないのである。

このように、フレデリックがマジョーレ湖の地理的状况に精通していることをエミリオは十分認識しているので、スイスに至るまでの方向や距離を逐一説明する必要がない。彼は“You know where to go?”³⁹ や “You know how far?”⁴⁰ と方角と距離について念を押すだけで十分なのである。フレデリックがパランツァから北の地域を訪れた形跡はないので、パランツァ以北の陸上部分の地理については明るくない可能性がある。しかし、湖上で釣り、特に流し釣りをもち経験していることから考えると、地理感覚の鋭いフレデリックが、湖上から眺めたパランツァ以北の地勢も、かなり把握していたとみて間違いのないであろう。それ故、エミリオは念のため、“Past Luino, Cannero, Cannobio, Tranzano. You aren't in Switzerland until you come to Brissago. You have to pass Monte Tamara.”⁴¹ とパランツァ以北の地名をあげるだけなのである。しかし、嵐の中で決行される逃避行の成否は、必ずイソーラ・ベラ島まで漕いで、目印となるパランツァの街の灯火を見つけ、そこから湖岸沿いに北上することがポイントとなるので、前日の流し釣りは翌日の逃避行の伏線として、入念に計算された描写といえよう。このように、ヘミングウェイが1920年から24年にかけて寄稿した、180編にも及ぶ読物記事や報道記事で確立された手法と、釣りに関する長年にわたるヘミングウェイの個人的な経験とが、『武器よさらば』の中では有機的に結合し、凝縮された目立たぬ形で出来事という生地の中に巧妙に織りこまれているのである。

注

- 1 Ernest Hemingway, *Men at War* (New York: Crown Publishers, 1942), p.xv.
- 2 Matthew J. Bruccoli ed., *Conversations with Hemingway* (Jackson: University Press of Mississippi, 1986), p.126. Harold Bloom ed., *Ernest Hemingway* (New York: Chelsea House Publishers, 1985), pp.134-35.
- 3 Carlos Baker, *Hemingway: The Writer As Artist* (Princeton: Princeton U. P., 1963), p.48.
- 4 We know, again via Mrs. Hemingway, how she and her husband walked over and over the routes he walks in this book, partly to check their accuracy. Everything must be absolutely and exactly right. Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (University Park: The Pennsylvania State U. P., 1966), p.290.
- 5 Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (New York: Charles Scribner's Sons, 1954), pp.119-120.
- 6 Charles A. Fenton, *The Apprenticeship of Ernest Hemingway: The Early Years* (New York: Octagon Books, 1954), pp.74-95.

- 7 1922年7月22日号
- 8 第一次大戦中の1917年にドイツに宣戦布告して戦勝国となったギリシアは、トラキア、エーゲ海諸島の一部を獲得し、アナトリアのイズミルの管理を約された。しかし、続くイズミル出兵では、ギリシアはケマル・アタチュルクの率いるトルコ国民軍の抗戦に会い、ギリシア・トルコ戦争（1919-22）を引き起こしたが敗北を喫し、23年のローザンヌ条約でイズミルと東トラキアを失った。この結果、約80万のトルコ人がギリシアを去ると共に、約200万のギリシア人が帰還したので、ギリシアは敗戦と帰国者保護のため国家経済は著しく悪化し、国際連盟とアメリカの援助で辛じて政府を支えた。
- 9 例えば、「もの言わぬ無惨な難民トラキアから続々流入」（“A Silent, Ghastly Procession Wends Way from Thrace”）（1922年10月20日号）、「ギリシアは背信から敗北を喫し、次いで反乱を誘発す」（“Betrayal Preceded Defeat, Then Came Greek Revolt”）（1922年11月3日号）、「難民行列の惨状」（“Refugee Procession Is Scene of Horror”）（1922年11月14日号）があげられる。William White ed., *Dateline: Toronto* (New York: Charles Scribner's Sons, 1985), p.232, pp.249-252.
- 10 「車、カヌー、手押し車、そしてタクシーを兼ね備えたルージュ——スイスではあらゆる人の楽しい乗りもの」（“Flivver, Canoe, Pram and Taxi Combined in Luge, Joy of Everybody in Switzerland”）（1922年3月18日号）William White ed., *Dateline: Toronto* (New York: Charles Scribner's Sons, 1985), p.110.
- 11 Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms* (New York: Charles Scribner's Sons, 1929), pp.280-83.
- 12 Michael S. Reynolds, *Hemingway's First War* (Princeton: Princeton U. P., 1976), pp.223-37.
- 13 ガラス張りのアーチ形屋根のついた商店街。
- 14 *Italia Settentrionale* (Milano: Touring Club Italiano, 1937), p.60.
- 15 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p.143.
- 16 ヘミングウェイは1918年にミラノのアメリカ赤十字病院に入院中、松葉杖で外出できるようになると、目抜き通りへ出かけて、物語の中で描かれているホテルやカフェを知ることができた。また、1922年5月末に、ハドリーと一緒にミラノを再訪し、これらの場所の記憶をあらたにしているので、この体験もミラノ市街の描写に役立っているよう。Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (New York: Charles Scribner's Sons, 1969), p.53, p.92.
- 17 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p.73.
- 18 Back at the lake for his third birthday he went fishing with his father for the first time. “He caught the biggest fish of the crowd,” wrote Grace. “He knows when he gets a bite and lands them all himself. . . . He is a natural scientist, loving everything in the way of bugs, stones, shell, birds, animals, insects, and blossoms.” A year later he was equally enthusiastic about nature. His birthday present the day he was four was an all-day fishing trip with his father. Baker, *A Life Story*, p.5.
- 19 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p.253.
- 20 Baker, *A Life Story*, p.108.
- 21 Baker, *A Life Story*, p.108.
- 22 この短篇で描かれているきまづい夫婦関係は、原稿の盗難事件以後、二人の間にすき間風が吹き始めた事情を物語っている。1922年11月下旬ギリシアとトルコ間の領土を画定する講和会議取材のため、ローザンヌに滞在中の夫のもとへ、ハドリーが原稿の大部分を持参しようとした理由については興味深い話がある。『移動祝祭日』（*A Moveable Feast*）の中で、ヘミングウェイはその理由を彼が原稿に手を加えられるよう配慮したためだと語っている。Ernest Hemingway, *A Moveable Feast* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964), p.73. しかし、アーチボルド・マクリーシュ (Archibald MacLeish) は別な見方をしている。講和会議にはマックレイカーとして有名なリンカン・ステファンズ (Lincoln Steffens) も取材に訪れていたので、ヘミングウェイは彼に「僕の親父」（“My Old Man”）をみせて、彼からそれを『コズモポリタン』（*Cosmopolitan*）誌に載せるべく送ってみるとの好意を受けている。従って、ハドリーはステファンズがヘミングウェイの作品を

- もっと読みたがるものと判断したためだ、とマクリーシュは語っている。Denis Brian, *The True Gen* (New York: Grove Press, 1988), p.41.
- 23 Reynolds, *Hemingway's First War*, p.160.
- 24 Robert O. Stephens, *Hemingway's Nonfiction: The Public Voice* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1968), p.65.
- 25 Reynolds, *Hemingway's First War* p.224.
- 26 Reynolds, *Hemingway's First War*, p.224.
- 27 His fishing trips of the early twenties in the Black Forest, for example, celebrated the pleasures of finding silvery trout and clear streams but were part of the larger picture of inflationary and bureaucratic bungling in postwar Germany. Stephens, *Hemingway's Nonfiction*, p.65.
- 28 *The Toronto Daily Star*, September 2, 1922. White ed., *Dateline: Toronto*, pp.197-200.
- 29 *The Toronto Daily Star*, September 1, 1922. White ed., *Dateline: Toronto*, pp.194-96.
- 30 *The Toronto Daily Star*, September 19, 1922. White ed., *Dateline: Toronto*, pp.208-10.
- 31 ヘミングウェイ夫妻は、1922年8月中旬にフランスのストラスブール経由でドイツの黒い森へ釣りとは徒歩旅行に出かけ、9月の大部分をそこで過ごしている。途中まで、ビル・ホーン (Bill Horne)、サリー・バード (Sally Bird)、ルイス・ギャランティエール (Lewis Galantière) とそのフィアンセが一緒であった。これらの一連の記事は、その時の成果である。Baker, *A Life Story*, p.95. Gerald B. Nelson and Glory Jones, *Hemingway: Life and Works* (New York: Facts On File Publications, 1984), pp.24-25.
- 32 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p.187.
- 33 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p.183.
- 34 Baker, *A Life Story*, p.51.
- 35 Baker, *A Life Story*, p.51.
- 36 Hemingway, *A Farewell to Arms*, pp.254-55.
- 37 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p.255.
- 38 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p.269.
- 39 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p.268.
- 40 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p.268.
- 41 Hemingway, *A Farewell to Arms*, p.268.

テキスト

- Hemingway, Ernest. *In Our Time*. New York: Charles Scribner's Sons, 1958.
- . *The Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Charles Scribner's Sons, 1953.
- . *The Sun Also Rises*. New York: Charles Scribner's Sons, 1954.
- . *A Farewell to Arms*. New York: Charles Scribner's Sons, 1957.
- . *A Moveable Feast*. New York: Charles Scribner's Sons, 1964.

参考文献

- Baker, Carlos. *Hemingway: The Writer As Artist*. Princeton: Princeton University Press, 1963.
- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Charles Scribner's Sons, 1969.
- Bloom, Harold ed. *Ernest Hemingway*. New York: Chelsea House Publishers, 1985.
- Brian, Denis. *The True Gen: An Intimate Portrait of Hemingway by Those Who Knew Him*. New York: Grove Press, 1988.
- Brucoli, Matthew J. ed. *Conversations with Ernest Hemingway*. Jackson: University Press of Mississippi, 1986.
- Fenton, Charles A. *The Apprenticeship of Ernest Hemingway: The Early Years*. New York: Octagon

Books, 1954.

Nelson, Gerald B. and Glory Jones. *Hemingway: Life and Works*. New York: Facts On File Publications, 1984.

Reynolds, Michael S. *Hemingway's First War: The Making of "A Farewell to Arms."* Princeton: Princeton University Press, 1976.

Stephens, Robert O. *Hemingway's Nonfiction: The Public Voice*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1968.

White, William ed. *By-Line: Ernest Hemingway*. London: Collins, 1967.

White, William ed. *Dateline: Toronto*. New York: Charles Scribner's Sons, 1985.

Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. University Park: The Pennsylvania State University Press, 1966.